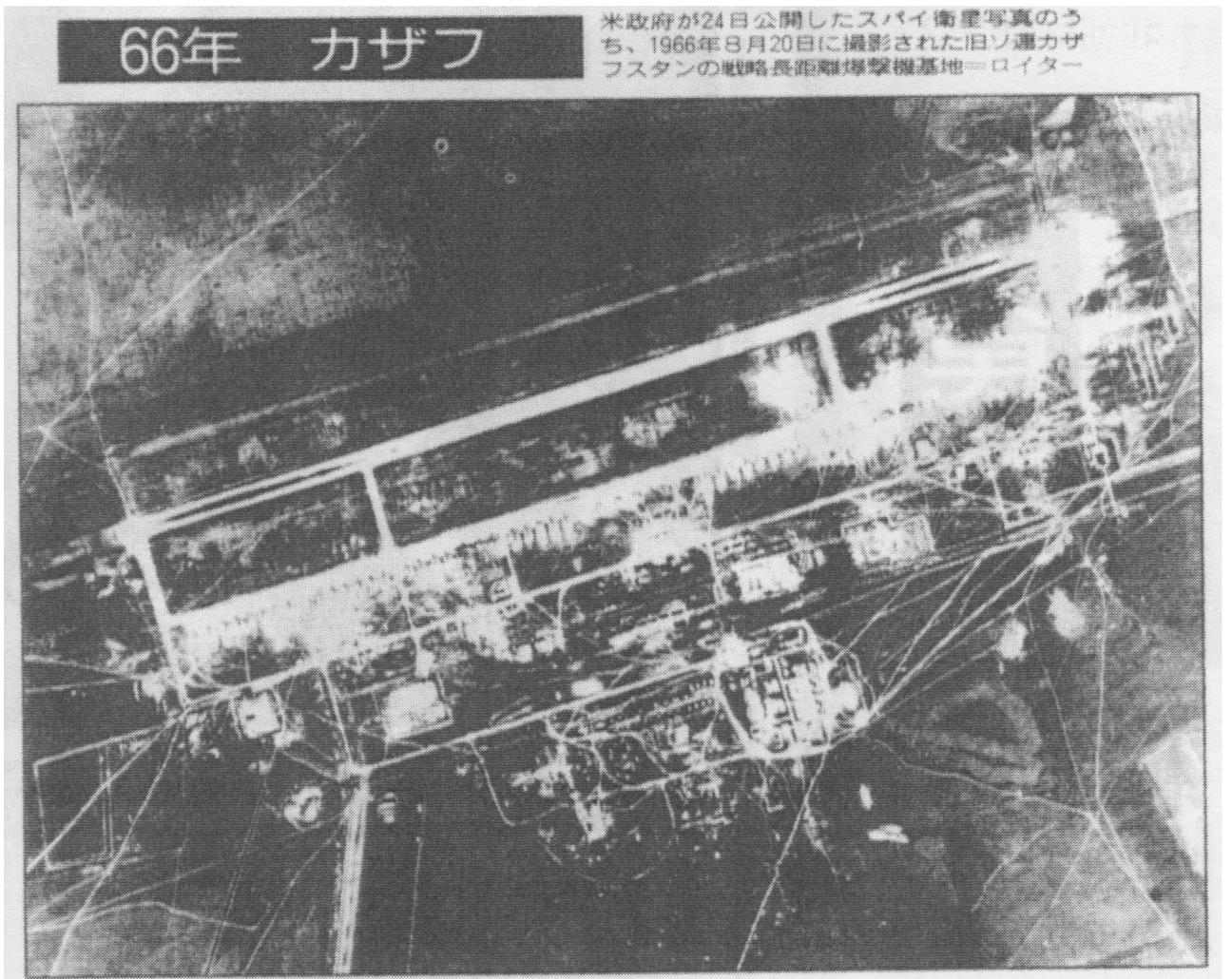


これは本当に戦略長距離爆撃機基地なのか

(神戸大地震のあった1995年2月25日朝日新聞夕刊)

米政府が24日公開したスパイ衛星写真のうち、1966年8月20日に撮影された旧ソ連カザフスタンの戦略長距離爆撃機基地＝ロイター



【ワシントン24日路透電】米中央情報局(CIA)は二十四日、スパイ衛星から撮った旧ソ連の戦略基地などの写真四枚を初めて公開した。大統領令に基づき、スパイ衛星による撮影が始まった一九六〇年から七二年までの約八十八万六千枚が、今後十八カ月間にワシントンの国立公文書館で公開される。

スパイ衛星写真 米が初めて公開

60年～72年の全88万6000枚

今回公開された四枚のうち、二枚は旧ソ連の核兵器基地の写り、一枚は旧ソ連の宇宙基地の写り、一枚は旧ソ連の戦略基地の写り。CIAは、一九六〇年から七二年までの約八十八万六千枚のスパイ衛星写真のうち、この四枚を初めて公開した。CIAは、一九六〇年から七二年までの約八十八万六千枚のスパイ衛星写真のうち、この四枚を初めて公開した。CIAは、一九六〇年から七二年までの約八十八万六千枚のスパイ衛星写真のうち、この四枚を初めて公開した。

【ワシントン24日 村野英一】米中央情報局(CIA)は二十四日、スパイ衛星から撮った旧ソ連の戦略基地などの写真四枚を初めて公開した。大統領令に基づき、スパイ衛星による撮影が始まった一九六〇年から七二年までの約八十八万六千枚が、今後十八カ月間にワシントンの国立公文書館で公開される。

スカラー・ポテンシャル干渉計

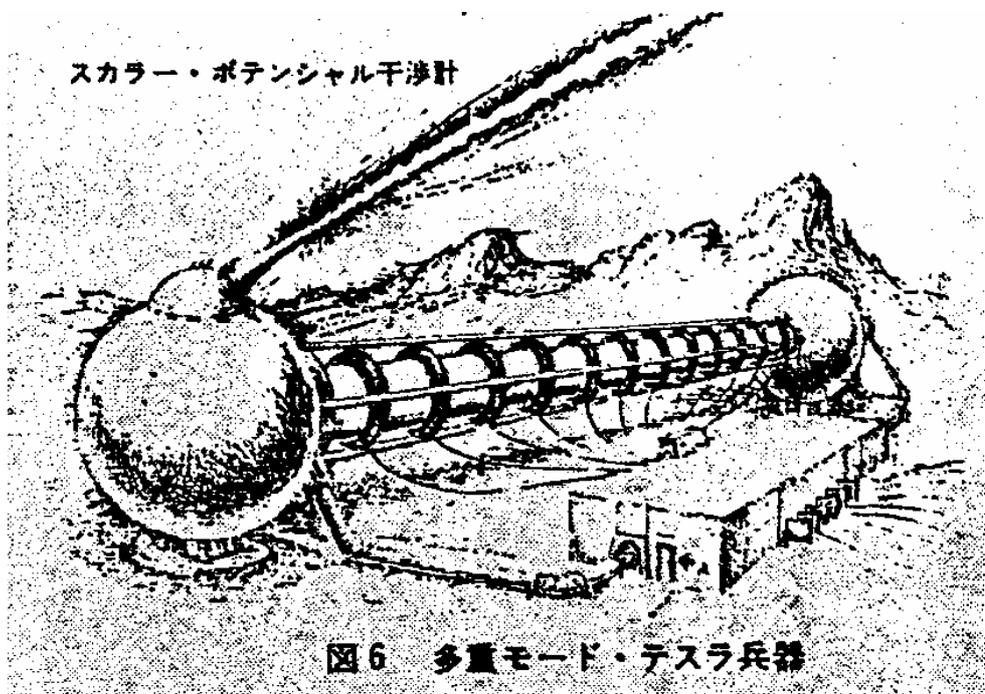
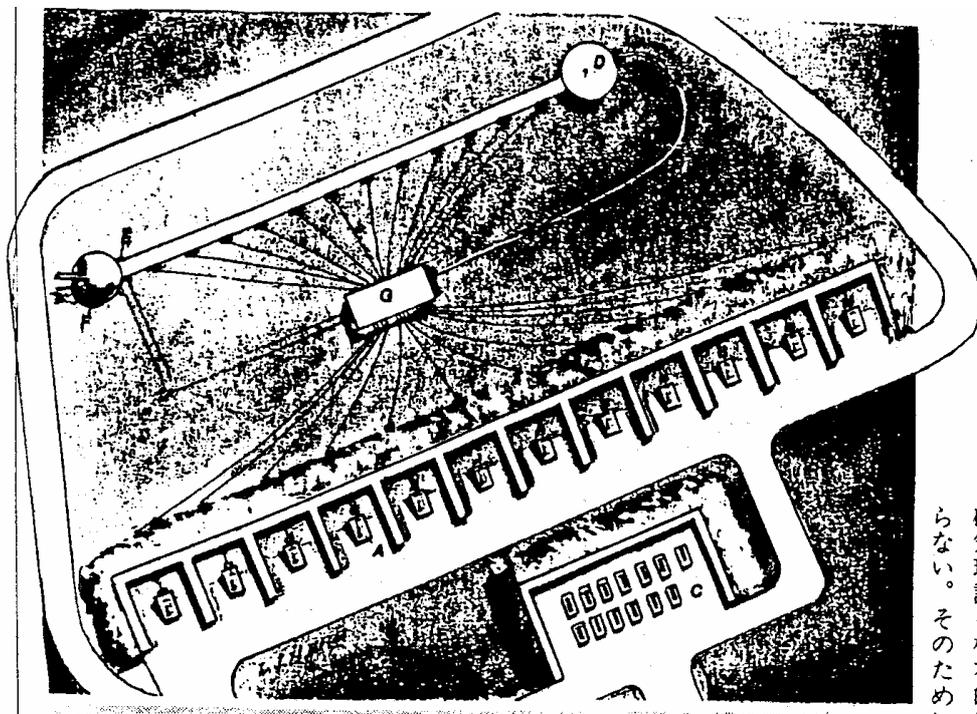


図6 多重モード・テスラ兵器



磁気理論を根本的に
らない。そのため

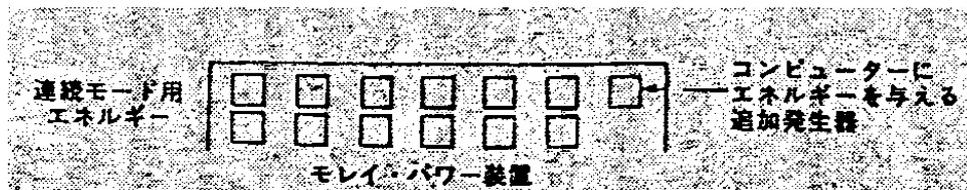
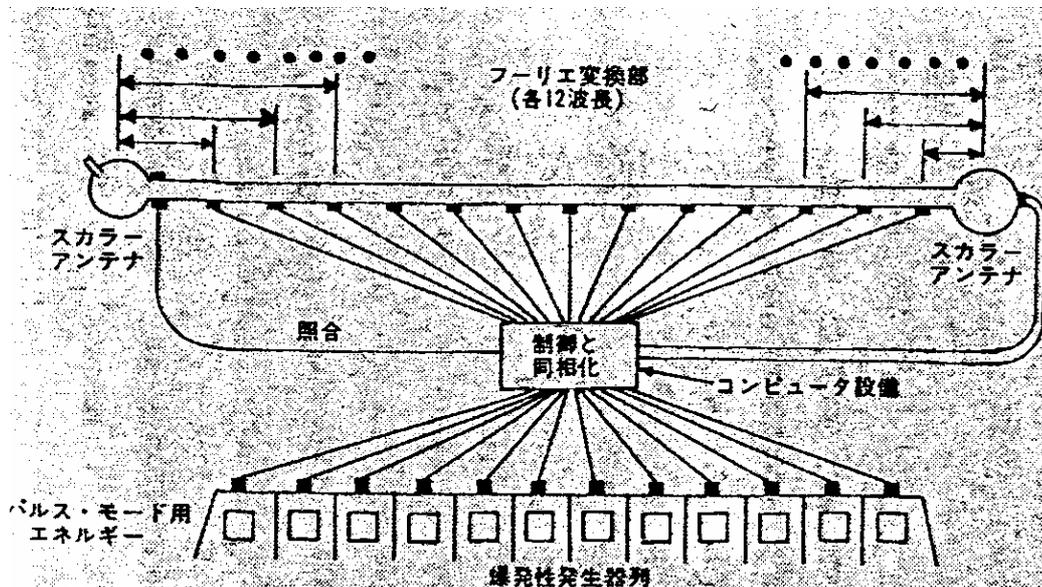
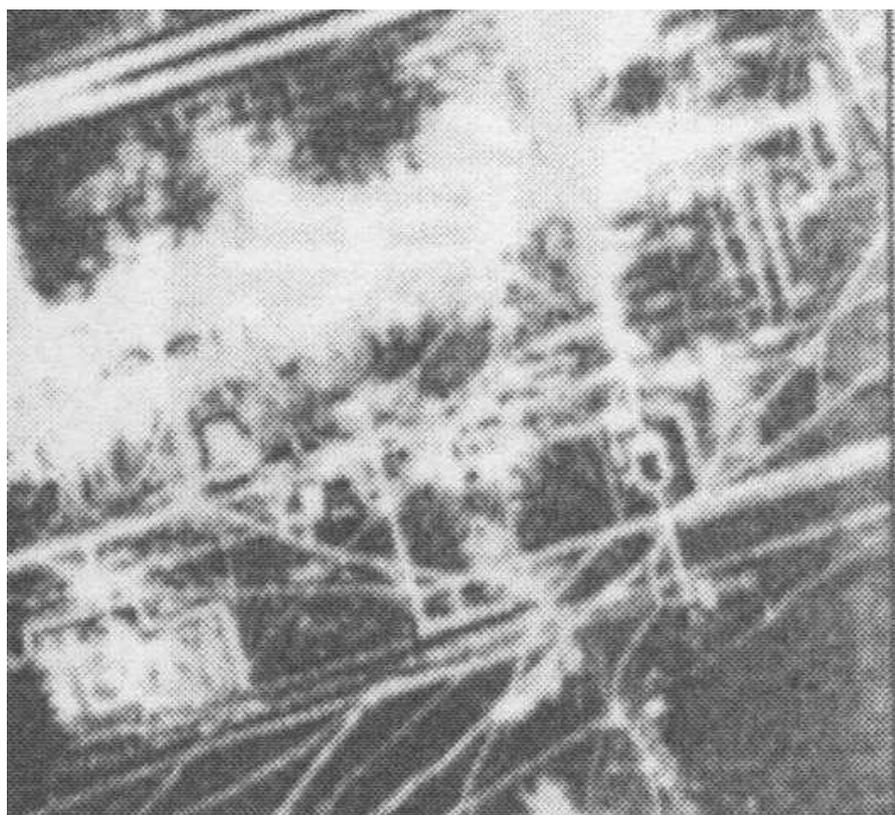


図7 サリシャガンの特斯拉兵器



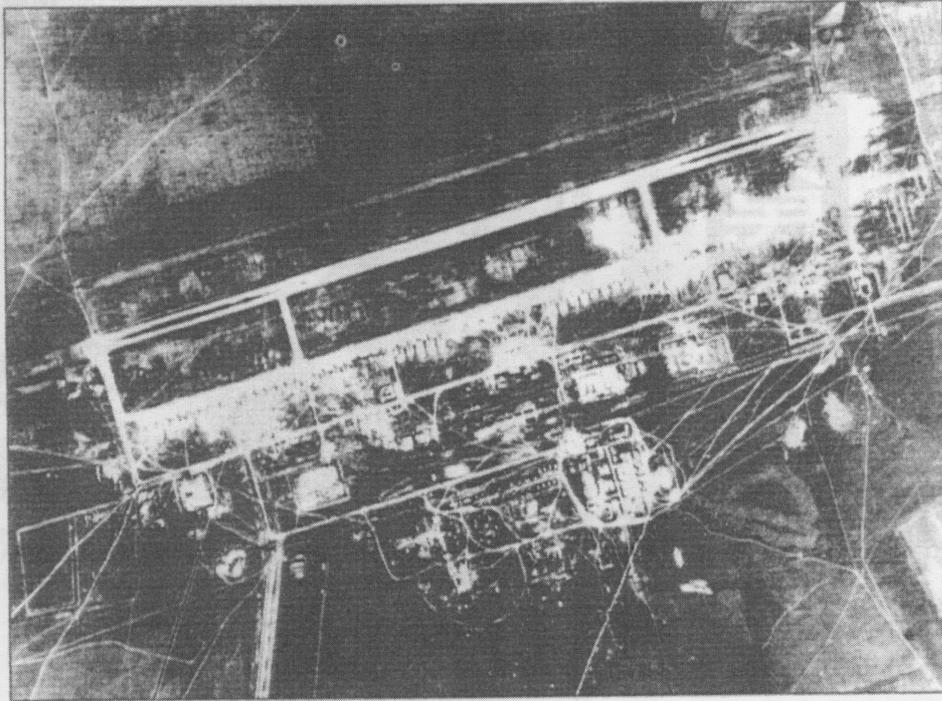


む



66年 カザフ

米政府が24日公開したスパイ衛星写真のうち、1966年8月20日に撮影された旧ソ連カザフスタンの戦略長距離爆撃機基地—ロイター



【ワシントン24日】村野英一「米中央情報局(CIA)は二十四日、スパイ衛星から撮った旧ソ連の戦略基地などの写真四枚を初めて公開した。大統領令に基づき措置で、スパイ衛星による撮影が始まった一九六〇年から七二年までの約八十八万六千枚が、今後十八カ月間にワシントンの国立公文書館で公開される。

スパイ衛星写真 米が初めて公開 60年〜72年の全88万6000枚

今回公開された四枚のうち、一枚は旧ソ連カザフスタンの戦略爆撃機基地の写真。ほかの三枚も旧ソ連を撮影したもので、火山の写真が含まれる。今後公開される写真には、軍事施設のほかに、森林破壊や地球の温暖化などをうかがわせる写真も含まれるという。スパイ衛星は六〇年代以降は「十数センチの物体まで区別できる」といわれるほど精密だが、軍事上の機密にあたるとして今回の公開の対象からははずされている。

リークが問題

仏内相「米が漏らした」 米「まったくでたらめ」

スパイ事件で舌戦



バスクワ内相

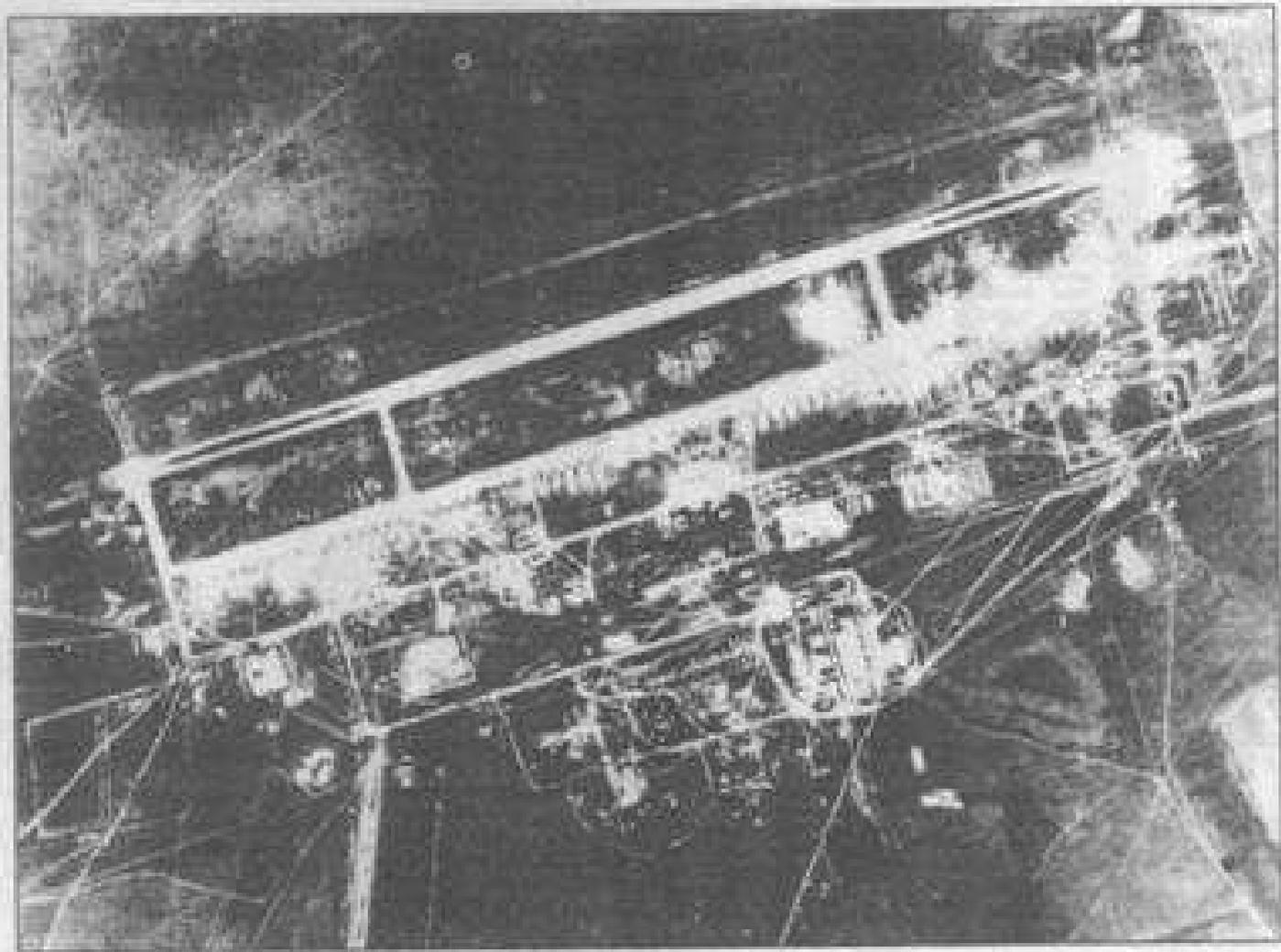
【パリ25日】磯松浩滋「米外交官ら五人がフランスでスパイ活動をした」とし、仏政府が米政府に対して本国召還を要求したことが新聞へのリークで公になった問題は二十四日、仏側の対スパイ組織の元締めであるバスクワ内相が「問題を漏らしたのは米側」と発言、在パリ米大使館が「まったくでたらめ」と反発するなど険悪な非難合戦に発展した。内相を除く仏政府側は事態の沈静化に躍起。何を狙いとしているのか、バスクワ氏の突出だけが目立っている。

事件の概要と外交官らの召還要求は、仏ルモンド紙が二十一日に特稿で報じた。同盟国同士でもスパイし合うのは珍しくないが、発覚した場合、通常は厳密裏に関係者の出国措置などがとられる。今回、米側がまず不快感を表明したのは、外交配慮を欠いた仏側の措置だった。しかし、バスクワ内相は二十四日のルモンド紙やラジオ局とのインタビューなどで、「こちらから事件を

「トン政権批判を武器に、全

66年 カザフ

米政府が毎日公開した空パノラマ写真のうち、1966年11月20日に撮影された部分でカザフスタン空軍の戦闘機が地上目標を攻撃している様子



米政府が24日公開したスパイ衛星写真のうち、1966年8月20日に撮影された旧ソ連カザフスタンの戦略長距離爆撃機基地＝ロイター

で区別できず、七二年から使われている新型の衛星写真は「十数センチの物体まで区別できる」といわれるほど精密だが、軍事上の機密にあたるとして今回の公開の対象からははずされている。

今回公開された四枚のうち、一枚は旧ソ連カザフスタンの戦略爆撃機基地の写真。ほかの三枚も旧ソ連を撮影したもので、火山の写真が含まれる。今後公開される写真には、軍事施設のほか、森林破壊や地球の温暖化などをうかがわせる写真も含まれるという。

スパイ衛星は六〇年代以降、ソ連の長距離核ミサイルなどの監視に当たってきた。

今回公開された写真の精度では、二割程度の物体ま

UFO と宇宙より

ベアデンの記事

単純な重ね合わせによる場合を除き、そこにある ϕ 3場が他の既存 ϕ 3場と直接反応したり、結合することはない。したがって現在では、 ϕ 場はまったく抵抗限度を持たず、無限速度であると考えられている。

実際は、 ϕ 4波は、媒質を横断中に地の既存 ϕ 4波のいくつかと作用する。またこの相互作用は電磁ベクトル場と波の中に、対結合を持ちこむことができるが、相互作用は現在、電気力学理論にはないものである。スカラー対結合の結果、 ϕ 4波上には有限量のベクトル抵抗が生じ、そのため無限速度ではなくなる。しかし、限定的な対結合のためにこの抵抗が小さいと、わずかに抵抗を示す媒体中を通るスカラー波の速度は、真空中の電磁ベクトル波(光)の速度より、依然として大きいことがある。一方で、対結合が激しく行なわれると、 ϕ 波は、真空中のベクトル光波の速度より相当遅い速度で動くことがある。

このように、 ϕ 4波の速度は可変であるだけでなく、制御すなわち調節可能なのである(たとえば、単にその初期振幅を変えるだけでも、与えられた媒質を通して対結合の割合が変わりスカラー波上の抵抗度合が変わる。)このようにテスラ・スカラー波は、現在の理論に背いて、光以下または光以上の速度を持つことができる。

また、スカラー波はアインシュタインの基本原理の一つにも反している。

それは、われわれの"新種の光"の波は光速によって限定されておらず、すべての観測者に対して同一であることを要しないからである。このように、テスラ・スカラー波は、

新しい"超相対性原理に至るのであり、この超相対性原理"と比べると、現在のアインシュタインの相対性原理は、高度に特殊なケースに過ぎない。

スカラー波とスカラー対結合の、精妙な実例を、自然の中に求めてみよう。

よく知られている通り、断層地質帯は、地球内部と断層地帯を通る応力、圧電気活動、地電流により、異常な光、音等を出すことがある。断層帯現象の調査中、私は、断層帯が文字通りスカラー干渉計であること、すなわち、スカラー- ϕ 4 波があれば、その波は干渉して建設的にも破壊的にも働くことができることを知った。しかし、干渉によって、電磁ベクトル波中に、スカラー対結合が生じる。この結合は干渉計自体から離れて起きることもある。このように、干渉計は、介在空間を通すベクトル伝送なしで、エネルギーを直接発生させることができる。

通常電磁ベクトル波で構成された、対になったスカラーと ϕ 波との結合が発生することがある。この3重結合により位相が180度ずれた別の電磁ベクトル波が出来る。通常電磁波は減少または削減する。相互作用する電磁ベクトル波と同じ位相に電磁ベクトル波が生じるように、スカラー3重結合が起きると、通常ベクトル波の振幅は増大する。

自然の中にあるスカラー干渉系

このように、スカラー・ポテンシャル波は、適当な条件下においては、対結合干渉により、遠方から、通常電磁波を増減させたり、発生させ、破壊させることができる。このことは、ウイテッカーが1903年の基本的業績で暗示したものと合致する。

地震断層帯は、このようなスカラー干渉計である。断層に近い両側のプレートには、応力と荷重の堆積があり、断層破砕面自体の中央には応力のリリースが存在する。岩石は局部的には非直線性であるから、その中の機械的応力と電流もまた局部的に非直線性である。その結果、断層干渉計の両側から多重周波数の ϕ 波が発生し、スカラーポテンシャル波の複合フーリエ級数パターンが2つ発生する。場合によっては、これら2つのフーリエ変換スカラー波のパターンは遠方で結合して、3次元空間パターン中に、安定した通常電磁場を発生する。スカラー干渉計の2つのスカラー・フーリエ級数パターンによって不安定に駆動されると、不安定に飛び舞う各種の幽霊光-スクープライトが発生することになる。

干渉計両側の応力が変わると、遠方のスカラー結合領域が影響を受ける。

このため応力光は動き、その型を変えるが、その型は数秒または数分の間、比較的安定していらる。岩石中の応力がひじょうに強力だと、応力光は、ベクトル電磁エネルギーの半球または球と結合する強い ϕ パターンの対を含むことがある。この場合、結合した

応力光球の領域にある空気の原子と分子は高度に励磁され、励磁状態が崩壊するにつれて放射エネルギーを放出する。

応力を受けた岩石中の圧電物質の多くは水晶粒子であるから、水晶の性質は特に興味深い。水晶の小粒ひとつひとつは高度に応力を受けており、応力の割れ目を持っている。さらに、水晶は赤外線と紫外線を通し、また水晶のスカラー干渉計の全部が無作為の方向性のため、熱力学的つりあいとは程遠いブリゴジン・システムを作ることがある。その場合には、このシステムは高度のエネルギーを持った顕微鏡的電磁変動に入りこんで、遠方に、大規模で秩序立った比較的安定したパタンの電磁エネルギーを生じさせることができる。

簡単にいうと、これらはすべて、断層自体から離れた場所に、比較的安定しているが、いくらかは不安定なパタンの電磁エネルギーを作る助けとなる。

大気中では、このようなスカラー干渉計は、雲の間、または空気中や、雲と地球間にさえできることがある。"天候"スカラー干渉計が、球電という珍しい現象をもたらすことがたまにある。球電のエネルギーが、地球応力光に比べてひじょうに強いのは、スカラー干渉計にエネルギーを与えるために、雲の間または雲と地球間の、膨大な電荷を利用できるからである。テスラは、この球電現象からスカラー波干渉の手がかりをつかんだのではないかと思われる。

地球応力光や球電をはじめ、事実上無減衰で、しかも超光速でエネルギーを無線伝送できるテスラ・システムも、この理論で説明することができる。しかし、これらは複雑であって、現在の電磁気理論を根本的に変更しなければならない。そのためには、4次元空間スカラ-静電位、スカラー波、対結合、通常の3次元フーリエ級数、ブリゴジン効果、岩石中の圧電物質の特性などを理論に取り込む必要がある。

